広島工業大学紀要研究編
第44巻（2010）pp.315-322
論　　文

島嶼集落における家・通り・まちの持続性に関する基礎的研究

――山口県上関町祝島集落を対象とした考察――

西岡　いづみ*・森保　洋之**・橋部　好明***
星出　直也****・池田　亜依*****・坂元　利衣******

（平成21年10月31日受理）

A fundamental study on the sustainable system of “house・street・town” in the islands village.

―― Consideration of the Iwaishima village.――

Izumi NISHIOKA, Hiroshi MORIYASU, Yoshiaki HASHIBE
Naoya HOSHIDE, Ai IKEDA and Rie SAKAMOTO

(Received Oct. 31, 2009)

Abstract

The aim of this study considers the sustained factors and the contents to form sustainable society for the solution of the environmental problem, and offers the basics documents.

Three division is as follows when we examine the sustained factors in the Iwaishima-village.

1. About “a house” in the old materials use of the house.
2. About “Nerihei streets” in the Iwaishima-village.
3. About “a village” formed by “the KABU” of the group of the mutual support.

We thought that the Iwaishima-village were sustainable society formed by an invisible system.

Key Words: Iwaishima Island, a Village Form, Sustainable System, House・Street・Town

1．研究の背景・目的

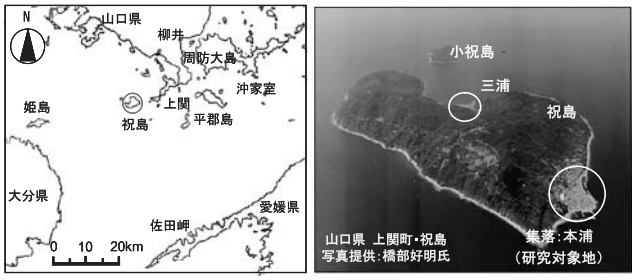
環境に多大な負荷を与えず，持続可能な社会を形成することは，現代社会の大きな課題である。山口県上関町にある祝島集落（**資料１**）は，島嶼部ゆえに自立性が求められており，そのため，様々な持続性の特徴が集落内で形成されてきた。その特徴は，以下の３点である。

①“家”の持続性：島嶼部ゆえに住宅の廃材処理が難しいことから古材利用を行っている。

②“通り”の持続性：壊しても再度利用可能な材料を使った塀とも壁とも見られる「練塀」と，その練塀が連続する「練塀通り」が形成されている。

③“まち”の持続性：前記の①，②と関わる相互扶助的な

資料１　祝島集落の位置



* 広島工業大学大学院工学系研究科環境学専攻・大学院生
** 広島工業大学環境学部・教授・工学博士
*** 山口県上関町教育委員会・教育委員長
**** 株式会社萬屋材木店・修士（環境学）
***** ランドブレイン株式会社福岡事務所・修士（環境学）
****** 美作建設株式会社・環境学部・卒業生

集団の「株」，や「惣・講」等が生活組織として集落に存在している。

これらの家・通り・まちの持続性を中心に，祝島集落の現状を把握し，持続性に関わる要因の抽出・分析を行う。その要因の枠組みの考察を行うことで，持続可能な社会を形成するための基礎資料を提供するものと考える。

２．既往研究と本研究との位置づけ

本研究と国内研究との対比を行なうと，住宅・宅地の循環的利用や転居[文献1),文献2)]，住居変容と親族ネットワーク[文献3)]，集落地の環境評価と持続性[文献4)]，等々が，一部において，本研究と関連・類似している。しかし，本研究の様に，家・通り・まち，それぞれにおける持続性に関する研究ではない。

また，祝島集落における過去の研究は，集落の空間構成要素や空間構成と生活組織との関係について研究してきたものである（文献９）～13)）。ここでは，これらを基に研究を行い，特に持続性という観点から，祝島集落を研究することが今までとの相違である。なお，本論文は，文献６）～８）を基に，考察を更に深めたものである。

３．研究・調査方法

集落調査は，①観察，②写真撮影，③実測，④住民への聞き込み，⑤住宅資材・廃材処理等々の物流の把握，⑥その他の関連資料収集，等々による。更に，これらの実態調査他から得られた内容により，集落の現状を分析･考察し，持続性に係わる要因を明らかにすることとする[注1)]。

４．持続性に関する考察

本研究では，持続性の定義を，「自然に順応しており，自然に多大な負荷を与えず，生活・空間等が維持・保全され続けること」とした。この持続性の定義を踏まえて，集落の持続性の考察を行うためのプレ調査を何度か行った。その結果，地域には，自然環境を基盤とした物的環境と社会的環境が存在していること。それらの地域の持続性は，持続性の対象・内容と持続性を支えている対象・内容・心が存在していると考えられること。また，物的環境・社会的環境において，物の循環・空間・共助・共同社会・順応を伝承することにより，地域は独自な環境を持続し続けること。等々が得られた。これらを，**図１**のようにまとめることができる。本研究では，この**図１**を，集落の持続性に関わる枠組み（仮説）として，祝島集落における持続性の特徴について考察することにした。

５．祝島集落の持続性に関する要因とその分析

祝島集落を形成している構成要素と枠組みは，文献 12）の図９と，文献９）の図９で示されている。これらの集落形成の要因を基に持続性の枠組みの考察を行う。

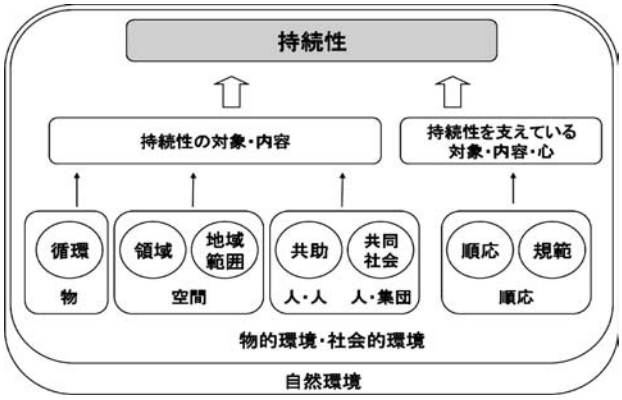


図１　集落の持続性に関わる枠組み（仮説）

写真１　祝島集落の古材利用の例

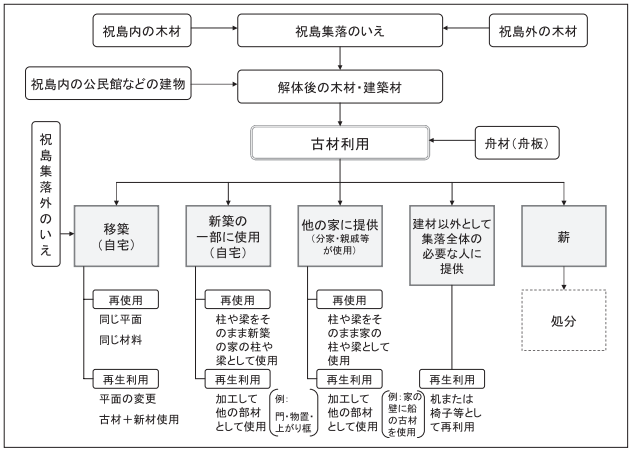


図２　祝島集落の古材利用状況

５－１．「家」の持続性の対象とその分析

祝島集落は，島嶼部ゆえに廃材処理が難しい。そのため，住宅内部の構造材，造作材のいたるところに古材が再利用されていた。**写真１**のように，古材利用の状況もかなり程度の差・用途の違いがあるように思われる。そこで，祝島集落の住民へのインタビュー調査を行い，古材利用状況を調査した。古材利用の状況は，大きく**図２**の流れが抽出さ

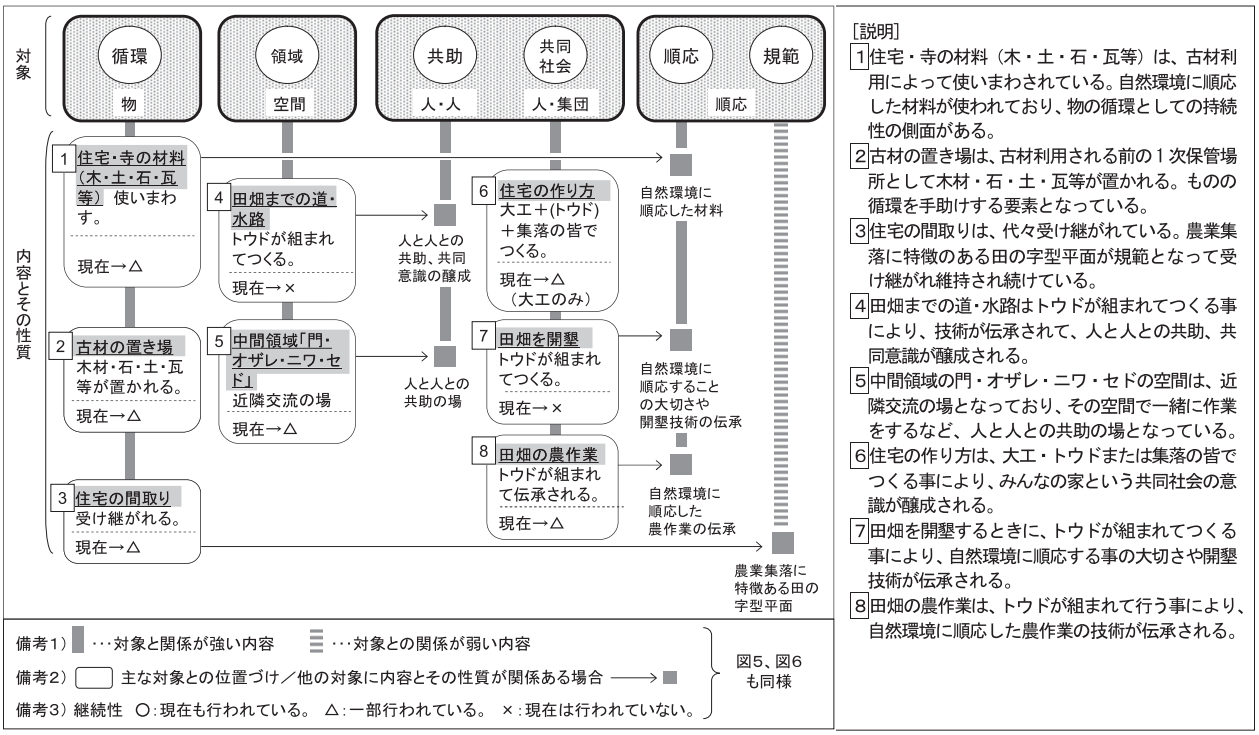


図３　祝島集落の家の持続性の考察

れた。このことから，住宅・寺の材料は使いまわされ，物の循環があると考えられる。また，住宅づくりは，大工のみでなくトウド（後掲）や集落の皆でつくる故に，共同社会が形成されるものと考える事ができる。

このように，祝島の家の持続性の内容については，**図３**中にある１から８の項目が挙げられた。これらの各項目は，循環・領域・共助・共同社会・順応・規範の対象と関わるものと考えられた（**図３**参照）。

５－２．「通り」の持続性の対象とその分析

祝島集落の通りを形成する要素のひとつとして，「練塀」が挙げられる（**図４**参照）。練塀に囲まれた通りは，集落の人々に「練塀通り」と呼ばれている。本来，練塀は，家の塀や壁として機能しているが，本研究では，もう一方の通り形成の機能に注目し，主に通り側にある練塀中心に考察することとする。祝島での「練塀」の古いタイプは，基礎をつくらずに，地面を少し均して，そのまま立ち上げている。そのため，この「練塀」を取り壊せば，跡かたも無い状態となる。石も土も再利用できるので，練塀の材料は，何度も使う事ができる。このことから，物の循環性が伺える。また，練塀づくりは，トウド（後掲）が組まれてつくる事により，人と人との共助関係もあるものと考えられる。

このように，祝島の通りの持続性の内容については，**図５**中にある９から14の項目が挙げられた。これらの各項目は，循環・領域・地域範囲・共助・共同社会・順応・規範の対象と関わるものと考えられた（**図５**参照）。

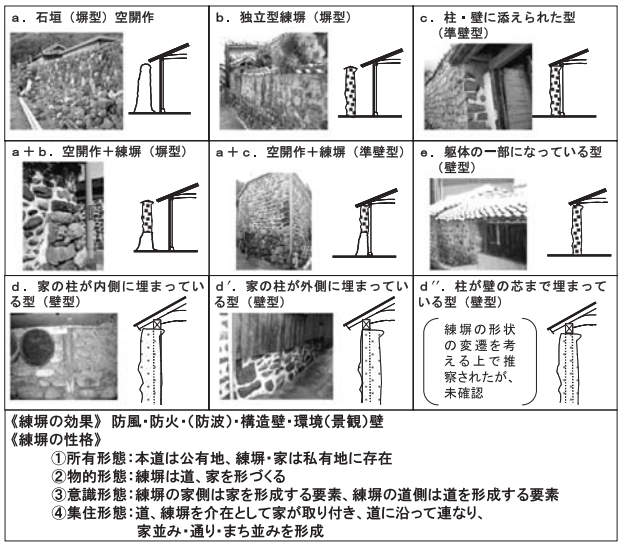


図４　祝島集落の練塀の種類とその効果

５－３．「まち」の持続性の対象とその分析

祝島の集落を形成するものとして，“惣・講・区・株・トウド”等の生活組織があり（**表１**参照），これらが，集落全体を形成する重要な要因となっていることが分かっている。

主に，祝島では，トウドと呼ばれる，田畑開墾時の相互労働提供（使役）が行われていた。このことから，人と人との繋がりが強く，共助意識があると考えられる。また，株組織は，共同社会の基本的要素のひとつと考える事ができる。この株については，家・通り・まちと関わりが大きいものと考えられるので，後の６章で取り上げ，持続性との関わりをみていくこととする。

表１　生活組織

名称	行為・機能
惣（そう）	祝島のような村落は、その範囲内に住む惣て（すべて）の構成員により形成されていたことから、惣村と呼ばれるようになった。
講（こう）	冠婚葬祭を共助共縁で行う単位のひとつであったと考えられる。講の内部は、連帯意識により結合していたと推測される。講は村の神社や寺での各種行事により結合したと考えられる。
区（く）	自治会区のまとまりは「区長」が取り仕切る。祝島集落は現在、1区内平均20軒の17区に整理されている。
株（かぶ）	山林や農地を含むある範囲の土地を、数人で協力して開墾する組織形態をいう。株の定義・機能、構成要素等は、表3に記載。
トウド	田畑開墾・ほかの相互の労力提供（使役）。トウドは「田人」と表記される地域もあるが、祝島では漢字で表記せず。一般的に言われる結（ゆい）と同様のもの。株の範囲で行われる場合がある。

このように，祝島のまちの持続性の内容については，**図６**中にある 15 から 24 の項目が挙げられた。これらの各項目は，循環・領域・地域範囲・共助・共同社会・順応・規範の対象と関わるものと考えられた（**図６**参照）。

５－４．まとめ

祝島集落を事例に，家・通り・まちの持続性に関して，図１の枠組みを仮説として考察を行った結果，この仮説のもとに，各種の事象・内容が大枠説明できたものと考える。家・通り・まちの持続性について，**図３**，**図５**，**図６**に示す２４項目の内容，それぞれに関して持続性の内容・性質・対象・継続性に関してまとめたものが**表２**である。更に，この中の主要な内容を取り上げ，持続性の枠組みに取り入れたものが**図７**である。これにより，ここでの持続性の枠組みは，物，空間，人，順応という大きく４つのもとに，物の循環，空間の領域と地域範囲，人と人との共助，人と集団である共同社会，順応と規範であり，そしてこれらを意識しながら，家・通り・まちを守り・維持することだと云える。

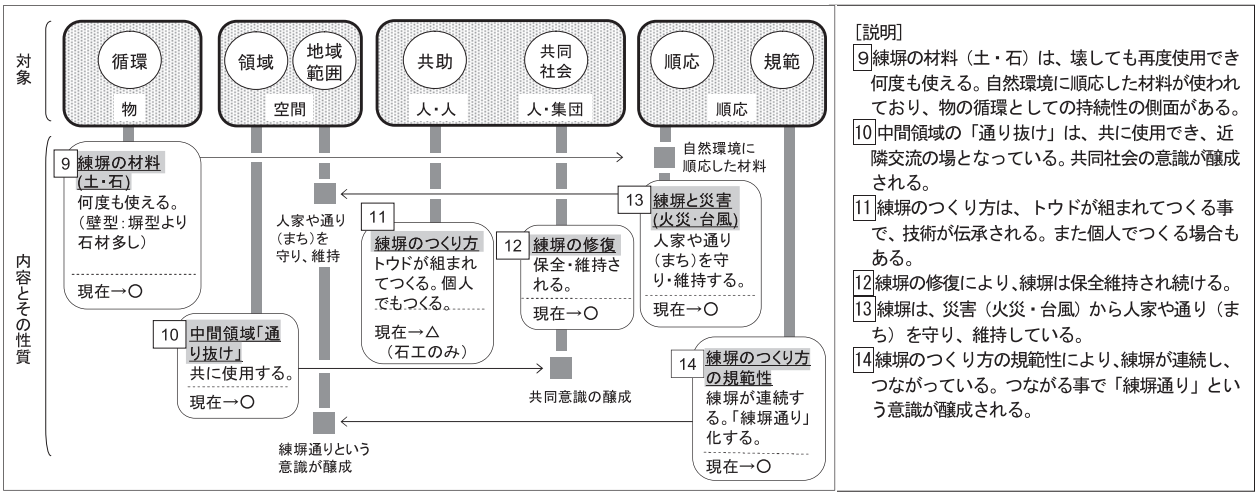


図５　祝島集落の通り（＋家）の持続性の考察

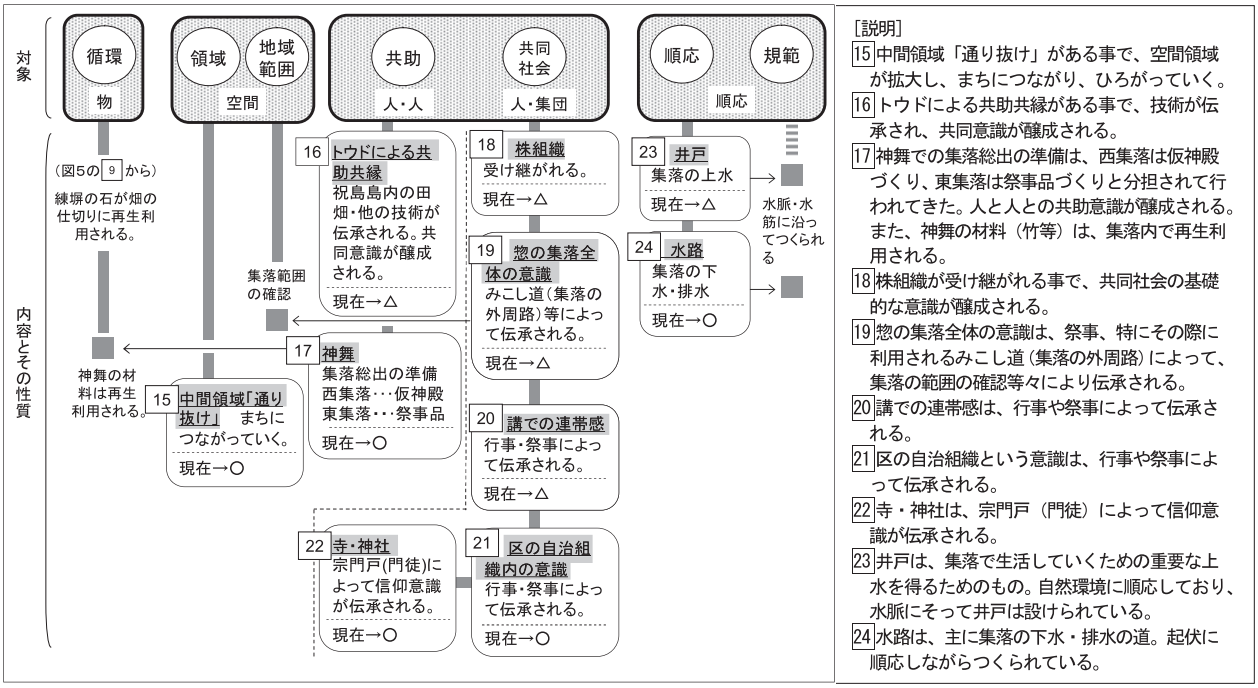


図６　祝島集落のまちの持続性の考察

6．株を中心とした持続性に関する基礎的分析

これまでの研究･考察のなかで，祝島集落に存在する「株」が，家・通り・まちの持続性に関係していることが明らかになりつつある。ここでは，株を中心として家・通り・まち相互の持続性に関する基礎的分析を行う。

6－1．祝島集落の株組織

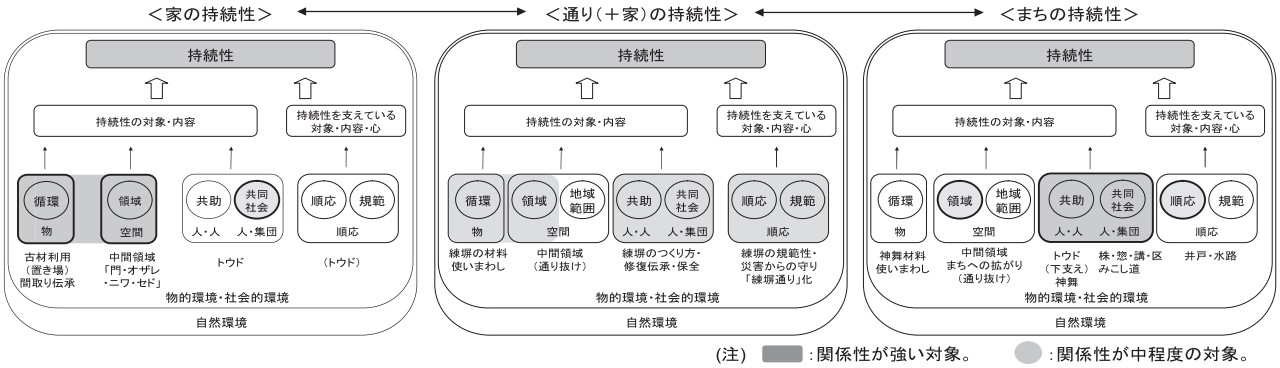
株は，本来農業を生業とする形態である。後掲の**図9**の資料⑴～⑷によると，田畑を分け合って生活するための相互扶助的な存在として，祝島集落では，寛政年間には，その株という形態を表している。現在，本家株は，明確に分かるもので53株存在する。株の定義・機能，株の範囲の構成要素，株の構成範囲・大きさ等については，**表3**に示している。

また，祝島の株について，古くは文献5）における，宮本常一氏の論考がある。宮本常一氏は，祝島の株関係について，幾つかの指摘を行っている。それを要約すると次の通りである[注2)]。①祝島では，「土地均分」が行われた。②農地の所有状況として，「株内制度」があった。③「切替畑」が行われた（土地割替の可能性あり）。④末子相続で均分相続。⑤本家，分家間の秩序は弱く，土地の所有観念は比較的弱く，家族労働に応じて土地をもつという共有観念が強い。⑥株は，始めは12株であり，50株内外にまでなった。

表2　祝島集落の家・通り・まちの持続性の内容・性質・対象・継続性

持続性の内容			持続性の性質 ＼ 対象	物	空間		人・人	人・集団	順応		継続性
				循環	領域	地域範囲	共助	共同社会	順応	規範	
家	1	住宅・寺の材料(木・土・石・瓦等)	使いまわす。	●					▲		△
	2	古材の置き場	木材・石・土・瓦等が置かれる。	●							△
	3	住宅の間取り	受け継がれる。	●						▲	△
	4	田畑までの道・水路	トウドが組まれてつくる。		●		▲				×
	5	中間領域「門・オザレ・ニワ・セド」	近隣交流の場。		●		▲				△
	6	住宅の作り方	大工＋(トウド)＋集落全体でつくる。					●			大工のみ
	7	田畑を開墾	トウドが組まれてつくる。					●	▲		×
	8	田畑の農作業	トウドが組まれて伝承される。					●	▲		△
通り	9	練塀の材料(土・石)	何度も使える。(壁型：塀型より石材多し)	●					▲		○
	10	中間領域(通り抜け)	共に使用する。		●			▲			○
	11	練塀のつくり方	トウドが組まれてつくる。個人でもつくる。				●				石工のみ
	12	練塀の修復	保全・維持される。					●			○
	13	練塀と災害(火災･台風)	人家や通り(まち)を守り・維持する。			▲			●		○
	14	練塀のつくり方の規範性	練塀が連続する。「練塀通り」化する。			▲				●	○
まち	15	中間領域「通り抜け」	まちにつながっていく。		●						○
	16	トウドによる共助共縁	技術が伝承される。共同意識が醸成される。				●				△
	17	神舞	集落総出の準備。西集落･･･仮神殿、東集落･･･祭事品	▲			●				○
	18	株組織	受け継がれる。					●			△
	19	惣の集落全体の意識	みこし道(集落の外周路)等によって伝承される。			▲		●			△
	20	講での連帯感	行事・祭事によって伝承される。					●			△
	21	区の自治組織内の意識	行事・祭事によって伝承される。					●			○
	22	寺・神社	宗門戸(門徒)によって信仰意識が伝承される。					●			○
	23	井戸	集落の上水(現在の上水：井戸→水道化)						●	▲	△
	24	水路	集落の下水・排水						●	▲	○

備考1）本表は図3、図5、図6に示す 1 ～ 24 の全体を表形式で示したものである。その 1 ～ 24 と、本表の1～24が対応している。
備考2）本表の内容は、図7の基礎資料として位置付けることができる。　備考3）対象：●：対象の位置づけ。▲：対象と関係あり。
備考4）継続性：○：現在も行われている。△：一部行われている。×：現在は行われていない。　備考5）■：関係性が強い対象。■：関係性が中程度の対象。



(注)　■：関係性が強い対象。　■：関係性が中程度の対象。

図7　祝島集落の家・通り・まちの持続性の考察

以上が指摘内容であり，このことから総じて，祝島集落は，平等な自治社会[注3)]であることが理解できる。

６－２．株範囲と通りとの関係

「まち」と「通り」との関係性を見出すため，文献14)に記載されている**図９**に示す資料(3)により，53株の範囲を対象に，古くからある主要な道の「本道」とそれと同等と考えられる「準本道」との関係性の分析を行った（**図８**参照）。また，株の構成形態も含めて分析し，**表４**のような結果が得られた。同表によると，A，Cと，ｉ．集合型が多い。このことから，株範囲を大事にしつつ，集落が形成されてきたことが考えられる。

６－３．時系列で見た株の変化

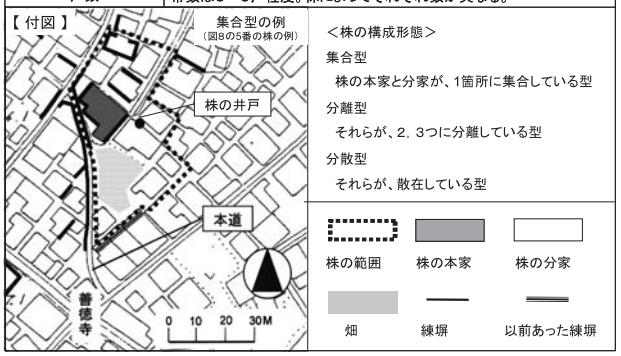
株制度は，祝島では，古くからはじまったとされるが，過去の２度の大火により，古い文献は殆ど残っていない。しかし，昨年の祝島調査で，年代別の４つの文献（**図９**の図中，参照）を得る事ができた。４つの文献を比較[注4)]すると，株の形成には，大きく４つのパターンのあることが分かった（**図９**参照）。

６－４．まとめ

通りとの関係や時系列でみた結果から，株は，祝島集落の「まち」を形成する持続的要因として，存在感の大きいものと云える。しかし，資料の正確な時代特定や構成員の不明な点もあり，株についてのインタビュー調査を中心に

表３　祝島集落の株の範囲の構成と構成形態

名称		内容
株の定義・機能	株（かぶ）	株は、農村に多くみられるもので、山林や農地を含むある範囲の土地を、数人で協力して開墾する組織形態をいう。
	株内（かぶうち）	開墾した土地を分与する主体を株の本家といい、株の本家と、土地を分与された複数戸の分家を総称して「株内」という。この中には同時に、親戚関係の本家と分家も存在している。
	株分け	開墾した土地を本家が分家に分与することを「株分け」という。
株と本道との関係		本道（ほんみち）とは、冠婚葬祭の際に通る、集落に古くからある主要な道のこと。なお、本道と同様と考えられる道を「準本道」としている。株の本家にあたる家は本道・準本道沿いにあることが多い。
株の範囲の構成要素	①本家・分家	田畑や土地を開墾する際、主体となる家を本家といい、本家に土地を分与される複数戸の家を分家という。本家と分家は、主には血縁関係である場合が多いが、祝島においては、他人が含まれている場合もある。
	②畑	畑は、株内の住居がある敷地と同じ敷地内にある場合と、株内の住居がある敷地とは異なる場所にある場合、またその両方持っている場合とがある。
	③井戸	祝島集落には多くの井戸が点在しており、個人井戸、共同井戸の両方がある。共同井戸のうち、株内で使われていた井戸も幾つか見つかった。株内で使われていた井戸の多くは本家の近くに存在する。
	④下水（水路）	水路については今までに調査を行ってきたが、下水については、まだ調査を行っていない。生活排水（下水）は株内の単位で処理していたのではないかと考えている。
	⑤練塀	株の中には、株の境界線を練塀で囲んでいるものがある。その場合の練塀の役割は、①自然環境からの私財保護、②防犯、③株の範囲を示す、等がある。
株の構成範囲（構成形態）		株の構成形態には、本家と分家が1つの敷地に集まっている「集合型」と、本家と分家が分かれて居住している「分散型」、大きく分散はしていないが、2、3つに株範囲が分離している「分離型」にわけられる。「集合型」の株は、敷地を囲む練塀があった可能性があると考えられる。
株の範囲・大きさ・戸数		現在明らかになっている株の数は53株。（明治年間のもの）株内の世帯数は3～5戸程度。株によってそれぞれ数が異なる。



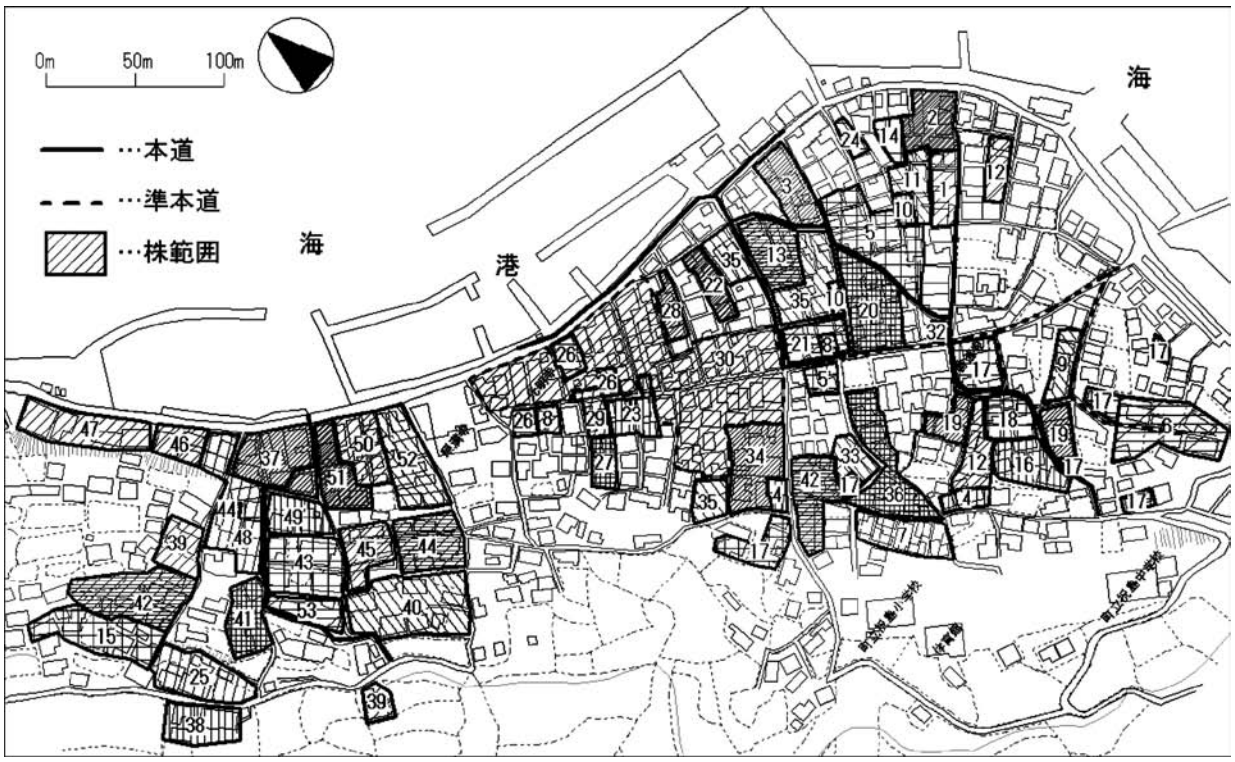


図８　株範囲と本道・準本道の位置

引き続き分析を行う必要性がある。

7．総括

祝島における持続性の要因として，離島である自然の厳しさや自立性に下支えされた，次の６つを抽出することができた。

①ものを大切にする意識を持っていること。
②トウド等の共助共縁で技術が伝承されてきたこと。
③家，通り等を集落全体で実際につくり，保全・維持してきたこと。
④空間に対して共同性意識（コモン意識）があること。
⑤共同性意識（コモン意識）がある仕掛けとして，株などが存在し，生活上機能してきており，物的なものを持続させるために，社会的な組織が大きな意味を持つこと。
⑥以上，これら全体が相互にからんでいること。

上記の，①～⑥のそれぞれの要因について，対象の範囲・内容，具体的な内容例を示すと，**表５**の通りである。

集落は島嶼部故に，資源が限られているため，それらを有効に利用し，互いに助け合いながら生活していた。それは，自主的，あるいは相互の合意による規範性を意識付けるきっかけとなっていたと考えられる。すなわち，物的なものに対して，個々人が集落全体の中で，集落人として生活することを基本に，集落が持続してきたものと考えることができよう。

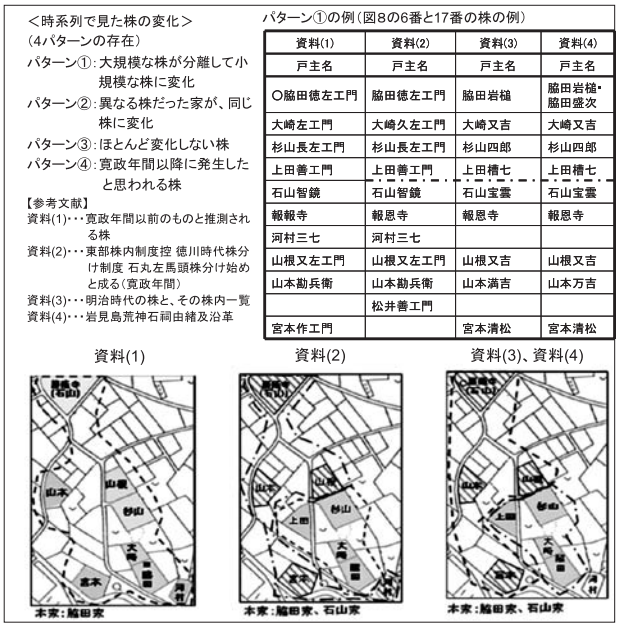
8．今後の課題

この度は，祝島集落を事例に，家・通り・まちの持続性について考察を行った。また，まちと通りに関する基礎的考察も行った。今後，更に現地調査を実施し，その結果から持続性の枠組みに関して解釈を深め，検証の確実化を図

表４　株と道との関係（表中の番号：図８の株番号）

[Ⅰ]株の構成形態 ⬆…本家 ⇧…分家 / [Ⅱ] 株範囲と本道・準本道との関係	ⅰ．集合型	ⅱ．分離型	ⅲ．分散型
A．株範囲が本道・準本道と接している。	1,2,3,6*,9,13,16,18,20,21,30,32,34,40,41,43,48,49 51,53,	5,19 ⑧⑫㉟	
B．株範囲の中を本道・準本道が通っている。	37		
C．本道・準本道から離れて株範囲がある。	7,11,14,15,22,23,24,25,27,28,29,33 36,38,44,45,46,47 50,52	⑧⑫㉟ 4,10,26,39,42	17

3,6,7,11,12,16,19,20,25,30,34,40,42,45：総本家を含む株　Ⓝ：本家を含む株範囲
31：位置不明



資料(1)	資料(2)	資料(3)	資料(4)
戸主名	戸主名	戸主名	戸主名
○脇田徳左工門	脇田徳左工門	脇田岩槌	脇田岩槌・脇田盛次
大崎左工門	大崎久左工門	大崎又吉	大崎又吉
杉山長左工門	杉山長左工門	杉山四郎	杉山四郎
上田善工門	上田善工門	上田槽七	上田槽七
石山智鏡	石山智鏡	石山宝雲	石山宝雲
報報寺	報恩寺	報恩寺	報恩寺
河村三七	河村三七		
山根又左工門	山根又左工門	山根又吉	山根又吉
山本勘兵衛	山本勘兵衛	山本満吉	山本万吉
	松井善工門		
宮本作工門		宮本清松	宮本清松

図９　時系列で見た株の変化

表５　祝島集落の家・通り・まちの持続性の要因

持続性の要因	対象(範囲) 家	通り	まち	対象(内容) 物 循環	空間 領域	地域範囲	人・人 共助	人・集団 共同社会	順応 順応	規範	内容(例)
① ものを大切にする意識を持っていること。	○	○	△	◎			○		○	△	住宅・寺の材料は、古材利用を行い、使いまわしている点から、「ものを最後まで使いきる」「もの大切にして長く使う」という意識が自然と身につくものと云える。また、練塀の材料を何度も使っている点も、住宅等の材料と同じで、使いまわす事で、ものを大切にする意識が根付くものと云える。神舞の材料や練塀の石も畑等に再生利用されており、ものを大切にする意識は保持されているものと云える。
② トウド等の共助共縁で技術が伝承されること。	○	○	○		○		○	◎	○	△	家づくりや、練塀づくりのとき、大工や石工のみでつくるのではなく、株や集落の皆がトウド等の共助共縁でつくる点、また、近隣の田畑までの道や水路、田畑の開墾、農作業もトウドが組まれてつくる点は、トウド等の共助共縁で技術が伝承されるものと考えられる。トウド等の共助共縁があることで、技術が伝承され、共同意識が醸成されているものと云える。
③ 家、通り等を集落全体で実際につくり、保全・維持してきたこと。	○	○		○		○		◎		△	住宅づくりは、大工のみではなくトウドまたは集落の皆でつくっていた点、練塀も個人でつくるものもあるが、トウドが組まれてつくられてきた点、主な道である本道沿いの通り側の練塀は、集落全体で修復することにより、練塀が保全・維持され続けてきた点、等に対して、家・通りを集落全体で実際につくり、保全・維持してきたことがうかがえる。
④ 空間に対して共同性意識（コモン意識）があること。	○	○	○		◎	△	○	○			中間領域である門・オザレ・ニワ・セドは、近隣交流の場となっており、その空間で一緒に作業するなど、人と人との共助の場ともなっている点は、この種の空間に対して共同性意識が高いものと云える。また、中間領域の中の各種の通り抜けも、空間を共に使用し、近隣交流の場となっている点、私有の土地のものが利用上共的なものになることによって、自分だけではなく、人と集団という共同社会の意識が醸成される点も、空間に対して共同性意識（コモン意識）があるものと云える。トウドの共助共縁があることも、技術が伝承され、共同意識が醸成されているものと云える。
⑤ 共同性意識（コモン意識）がある仕掛けとして、株などが存在し、生活上機能してきており、物的なものを持続させるために、社会的な組織が大きな意味を持つこと。		△	○	△		○		◎	○		株組織が受け継がれる事で、共同社会の基礎的な意識が醸成されてきた点、惣の集落全体の意識は、祭事やその際に利用されるみこし道（集落の外周路）によって、集落の範囲の確認等々により伝承されてきた点、講での連帯感は、行事や祭事によって伝承されてきた点、区の自治組織という意識は、行事や祭事によって伝承されてきた点、等々は共同性意識を持つ仕掛けとして存在し、生活上機能してきており、物的なものを持続させるために、社会的な組織が大きな意味を持つものと云える。
⑥ 以上これら全体が相互にからんでいること。	○	○	○	○	○		○	◎	○		上記の②と③のように家・通り等をつくるときは、トウドが組まれてつくられて、技術が伝承されながら保全・維持してきた点、②と④のようにトウドの共助共縁があることで、技術が伝承され、共同意識が醸成されている点、等々から、これら全体が相互にからんでいるものと云える。

（備考）　対象(範囲)：○：関係性が大　△：関係性が小　／　対象（内容）：◎：関係性が大　○：関係性が中　△：関係性が小

り，家・通り・まちの相互の関係性をみていきたい。

また，それらの結果から，他の島嶼集落[注5)]にも研究範囲を拡げ，応用する手立てについて考察することも，今後，視野に入れるべき大きな課題である。

注

（以下に示す「n)」は，本論文中の「注 n)」と対応する）

1）本研究は，昨年度は２ヶ月に１度，今年度は，１ヶ月に１度，祝島集落に赴き，現地フィールドワークとワークショップを繰り返し行った成果に基づいている。そのほかに，郵送，Eメール等を用いて，調査を随時行い，その成果も含んでいる。

2）文献５）にて，宮本常一氏は，祝島の株関係につて，幾つかの指摘を行っている。そのなかでも，pp.606 からの「４章　舸子浦外の土地均分」に祝島が取り上げられており，本文中の内容の①は，pp.610，②③は，pp.611，④⑥は，pp.612，⑤は，pp.613 の記載内容から読みとることができるものである。

3）祝島集落の近隣に位置する平郡島は，西と東に集落が形成されている。西の集落は，長子相続であり，東の集落は，祝島と同様の均分相続であるといわれている。東の集落の方が，西の集落よりも，平等な自治社会であると考えられるが，今後，その点も含めて調査を行う必要がある。

4）資料⑴は，資料⑵の戸主名と一致する場合がある為，寛政年間，もしくはそれ以前のものと判断される。戸主 15 戸は「本家」と記載されているため，「総本家」であると考えられる。資料⑵は，町衆から入手したもので，寛政年間（1789 年～1801 年）のものと思われる株の資料である。資料⑶は，明治時代の状況について，大正 12 年から昭和２年にかけて調査されたものであり，戸主の氏名は，明治年間を主としている。資料⑷の岩見島とは，祝島の古称である。戸主名が資料⑶と一致している場合が多く，年代は明治時代のものと判断される。以上より，資料⑴⑵⑶⑷の順で年代変化するものと仮定して比較・分析を行った。

5）現在，広島県廿日市市の宮島を対象に持続性に関するプレ調査を行っている。宮島の東集落の町家の床下等には，転用材が使われていた。祝島と同様，古材利用がなされていたと考えられるが，今後，本研究で得られた結果を基に，宮島の東集落の方を対象に，持続性の枠組みに関する本格調査（実地調査，インタビュー調査ほか）を行う予定である。

文　献

（以下に示す「n)」は，本論文中の「文献 n)」と対応する）

1）橋本大・山崎義人・重村力・山崎寿一・上野浩一・杉野香織；人口増加しつづける坊勢島における住宅・宅地の循環的利用：地域環境の持続に向けた地域人口の再生産に関する研究・その３，日本建築学会大会　学術講演梗概集　講演番号 6081　pp.615 ～ 616（2006）

2）山崎義人・橋本大・重村力・山崎寿一・上野浩一・杉野香織；人口増加しつづける坊勢島における転居の実態：地域環境の持続に向けた地域人口の再生産に関する研究・その２，日本建築学会大会　学術講演梗概集　講演番号 6080　pp.613 ～ 614（2006）

3）門永琢・本多友常・平田隆行；雑賀崎における住居変容と親族ネットワークに着目した集落持続性：傾斜環境における住空間変容の要因分析，日本建築学会大会　学術講演梗概集　講演番号 6076　pp.605 ～ 606（2006）

4）徳勢貴彦・鳴海邦碩・岡絵理子；歴史的集落地の環境評価と持続性に関する基礎的研究，日本建築学会計画系論文集　第 604 号　pp.69 ～ 75，（2006）

5）宮本常一；瀬戸内海の研究　島嶼の開発とその社会形成－海人の定住を中心に，未来社（1965）

6）西岡いづみ，森保洋之；祝島集落における家・通り・まちの持続性に関する基礎的研究　日本建築学会住宅系研究論文報告会論文集４　pp.53 ～ 62（2009）

7）西岡いづみ，森保洋之；祝島集落における家・通り・まちの持続性に関する基礎的研究，日本建築学会大会　学術講演梗概集　講演番号 5815　pp.387 ～ 388（2009）

8）西岡いづみ，坂元利衣，森保洋之；祝島集落における“いえ・通り・まち”の持続性に関する基礎的研究，日本建築学会中国支部研究報告集　第 32 巻　講演番号 0219　pp.1 ～ 4（2009）

9）橋部好明，森保洋之，池田亜依，木本渉，坂元利衣，西岡いづみ；祝島集落の生活形態からみた空間構成に関する研究，広島工業大学紀要　研究編　第 43 巻　pp.365 ～ 372（2009）

10）池田亜依，森保洋之；祝島集落の生活形態からみた空間構成に関する研究，日本建築学会大会　学術講演梗概集　講演番号 5711　pp.313 ～ 314（2008）

11）池田亜依，正渡智章，三浦佑也，森保洋之；祝島集落の空間構成に関する研究，広島工業大学紀要　研究編　第 41 巻　pp.233 ～ 240（2007）

12）池田亜依，森保洋之；祝島集落の空間構成に関する研究－空間構成要素の枠組みの考察－，日本建築学会　住宅系研究論文報告会論文集１　pp.185 ～ 194（2006）

13）森保洋之，星出直也；祝島における集住空間の構成要素に関する研究，日本建築学会計画系論文集　第 585 号　pp.9 ～ 16，（2004）

14）山口県文化財愛護協会；周防祝島の神舞行事，（1978）

15）株関係の文献：図９の中に示す資料⑴～資料⑷の４文献。なお，資料⑶は，文献 14）の中に含まれている。

謝　辞

本研究を進めるにあたり，情報収集や，それらの考察を行う上で，協力して頂いた，前・上関町教育委員会・次長　河村満生氏，またヒアリング調査等に協力して下さった祝島集落の氏本長一氏・国弘公敏氏・ほか多くの皆様，並びに，広島工業大学内に設置された「地域・集落計画研究センター」の学内外のメンバーの皆様，特にご支援ご指導頂いている，大阪市立大学・名誉教授　住田昌二先生に厚くお礼申し上げます。更に，協力してくれた学部・大学院の OB・OG の方々，特に，木本　渉氏に厚くお礼を申し上げます。

付　記

本研究は，㈶「住宅総合研究財団」2009 年度研究助成によって実施した研究の成果の一部であります。貴財団に対しまして，記して謝意を表させて頂きます。